

2024(令和 6)年度入学試験問題

国語

(注意) 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。

盈進高等学校

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

これまでに地球上に出現した生物種のうち、じつに九九・九パーセントがすでに絶滅している。子孫を残すことができず、系統が途絶えてしまったのだ。いま私たちが目にするのできる生き物の種類は **a** バクダイな数にのぼるが、それはこれまでに出現した生物種のうち、わずか〇・一パーセントにすぎない。では、残りの九九・九パーセントの生き物たちはどこへ行ってしまったのだろうか？ 彼らはどうしていなくなってしまったのだろうか？ こうした疑問がわきおこってくるのである。

※ ドーキンスの諸著作をはじめとして、優れた進化論の読み物は、生き物たちが長い時間をかけて成し遂げた環境への適応、その結果として彼らもつことになった **b** キョウウ的な姿形や生態を **A** 余すところなく見せてくれる。それらはまさしく見事というほかないものだ。だが、読んでいくうちに、成功した企業の社史でも読んでいるような気分になってくる。現在の地位を獲得するまでにはそれなりに苦労もあつただろうけれど、あくまでもそれは栄光の軌跡である。そこには、滅んでいった敗者たちに割かれるスペースはない。彼らはただ消えゆくのみだ。そう、見送られることもなく！

これまで地球上に生息してきた生物種の九九・九パーセントが絶滅しているのだとしたら、誕生した種はいずれすべて絶滅するのだといっても過言ではない。そう考えただけでも、滅んだものを消えるにまかせるわけにはいかなくなるのではないか。

試しに、会社の歩んだ栄光の軌跡だけでなく、業界全体の動きを一枚のカンヴァスに描くとしたら、どうなるだろうか。夜空を切り裂く稲妻を描いたような絵になるのではないだろうか。稲妻はもちろん栄光の軌跡だ。同時に広く深い暗闇がカンヴァスの全面を覆っているにちがいない。その暗闇を **c** ウめ尽くすように塗り込められているのが、滅んでいった者たちだ。絵画の **d** カンショウ者としては、ここで稲妻だけでなく暗闇にも目を凝らしてみたところで、バチは当たらないだろう。① 絵の具もたっぷり使われている。そうすると、はじめは真っ黒なだけに見えた暗闇にも、じつは微妙な陰翳があるということに気づくかもしれないし、その結果、② 稲妻の美しさをよりよく堪能することができるようにもなるかもしれない。

「みんな何処へ行った？」という問いは、彼らの所在や現住所を問うているわけではない。どこにいたかって、それは冷たい土の中に決まっ

いる。なにしろ絶滅してしまったのだから。そうではなくて、この問いは「ここにいてもよかつたはずなのに、みんなどうしていないんだ？」と、彼らの不在（彼らについて語られないこと）を問題にしている。そして、彼らをここに存在せしめること（彼らについて語ることを要求している）である。

偉大なロックンロールバンド、ザ・ローリング・ストーンズの偉大なギタリスト、キース・リチャーズはかつて、「ロックだロックだと言うけれど、ロールはいつたどこに行っちゃったんだ？」とB嘆息したことがある。キースはなにもロールの所在を尋ねたわけではない。彼は、ロールの不在（あるはずのものがいないこと）を問題にしたのであり、ロックとともにロールをも召喚すること、つまり、「ロックンロール」を要求したのである。③「みんな何処へ行った？」という疑問は、このキース・リチャーズ的な意味で理解してほしい。

以上は、絶滅という現象にもっと注目してもよいという、いわばC的な理由だ。そうすることで、進化という現象へのより深い理解が得られるようになるだろう。だが、それだけではない。私たちは絶滅という現象にもっと注目したほうがよいという、D的な理由もある。進化論の本から離れて、私たちが日々の暮らしで出会う進化論風の語りにもっと注目したとき、私たちは絶滅という観点にもっと注目してもよいというだけでなく、それを必要としてもいるのだということがわかってくるはずだ。

私たちの日常生活は進化論の比喩的な用法にあふれている。なかでも典型なのはビジネスや処世術、※しせいじゆつ人生訓で用いられる進化論（「ビジネス進化論」だろう。これらの語り手たちは、進化論が教える生物の世界をモデルとして引きあいに出しながら、私たちに絶え間なく「進化」しつづけるよう命じる。そして厳しい競争を勝ち抜いていこうと鼓舞する。テレビ、新聞、雑誌、ネット、eカンバン、中吊り広告、社員研修等々で、こうしたものを見ない日はない。

④彼らはこんな風に語る。いわく、この社会は生き残りをかけたサヴァイヴアルゲームの舞台だ。生物の世界と同じように、そこでは優れた者だけが生き残り、劣った者は消え去る運命にある。ライヴアルとの競争に敗れたら、滅び去るほかない。君たちは恐竜や三葉虫のように滅びていきたいのか。そうなりたくなければ、変化する環境に適応していかなければならない。そして不断に進化をつづけていかなければならない。

個人も企業も国家も、ビジネスマンも政治家もアスリートも、みんなこのサヴァイヴアルゲームのプレイヤーなのだ。だから、たえず競争し、適応し、進化をつづけよ、※うんぬん云々。

⑤勇ましい話である。E、努力や心がけ次第で勝ったり負けたりするような世界ならば、こうした訓話もひよつとしたら役に立つかもしれない。F、モデルとなる生物の世界は、九九・九パーセントが絶滅する世界である。この事実を前にして、例外中の例外である〇・一パーセントの稀有な成功例ばかりをお手本にするのでは、いかにも危なっかしいのではないだろうか。千にひとつの僥倖に恵まれた者を除いて全員が滅びゆく運命にある世界で、語り手たちはなぜか自分たちがわずか〇・一パーセントを占めるにすぎない勝ち組に属するのだと思いついて入るようなのである。思わず、本気なのか？ と尋ねたくなる。

まあ、べつに本気というわけでもないのだろう。実際に「進化せよ。さもなければ……」式の訓話を心から信奉している人など、それほど多くはないのかもしれない。とはいえ、こうした訓話が一種の定型句や決まり文句としてすでに確固たる地位を築いていることはたしかだ。また、私たちがこうした訓話をすんなりと理解できてしまうことも、この社会にはそれを説得的な号令として受け入れるノリや雰囲気が存在することもある。また、たしかなことである。そうでなければ、このような進化論風の訓話がマスメディアを通じてこれほど大量に流通するはずがない。

結局、私たちが日常的に接する進化論風の語りの多くは、自分たちの願望や人生訓に都合のいいように、生き物たちを勝手に呼びだしているだけなのだろう。考えてみれば、⑥滅んでいった生き物たちにたいしてずいぶん失礼な話である。もし自分たちがこんな辱めを受けたとしたら、とても黙っていられないはずだ。とはいえ、不当な扱いに耐えかねた恐竜たちが反乱を起したり、三葉虫の大群がクレーム電話を寄こしてきたりすることはない。彼らはもうこの世にいないのだから。そこは私たち人間の言いつ放しである。

もし本気で進化論の知見をビジネスや処世術に活かしたいと思うなら、むしろ絶滅を基準として作戦を練りなおしてみるべきではないだろうか。生き残る確率より滅び去る確率のほうが九九九倍は高いのだから、滅び去った者たちに思いを馳せ、滅び去る立場でものを考えてみることは、十分に理にかなったことだろう。それに、後に見るように、⑦大規模な絶滅こそが革新的進化に檜舞台を提供してきたということを、地中に眠る化石記録は語っている。

栄光の軌跡はたしかによいものだけでも、存続に失敗することが生物としてむしろ標準的なありかたなのだとしたら、そうした失敗からこそ多くを学ぶことができるはずなのだ。トーマス・エジソンもヘンリー・フォードもジョン・ロックフェラーも松下幸之助もビル・ゲイツもリチャード・ブランソンも、みんな「失敗から学べ」と言っているではないか。

だからここで、声を大にして「みんな何処へ行った？」と問うてみよう。

生命の歴史は、より優れた存在へと向かう一直線の道のりなどではまったくない。それは波瀾はらんはんじょう万丈まんじょうのロング・アンド・ワインディング・ローダだ。※

(吉川浩満『理不尽な進化 増補新版 —— 遺伝子と運のあいだ』による)

※ドーキンス：クリントン・リチャード・ドーキンス。進化生物学・動物行動学を研究するイギリスの生物学者。

※ザ・ローリング・ストーンズ：イギリスのロックバンド。一九六〇年代前半から半世紀以上、今なおロック界の第一線で活動している。

※処世術：社会生活をより巧みに生きるための方法や技術。

※云々：引用した分や語句の後を省略したり、ぼやかしたりするときに「以下略」の意味で添える語。多くは「いわく」と呼応して用いられる。

※稀有：まれなこと。めったにないこと。 ※僥倖：偶然の幸運。思いがけないしあわせ。

※信奉：ある宗教・思想などを固く信じて尊ぶこと。

※ロング・アンド・ワインディング・ロード：イギリスのロックバンドであるビートルズの楽曲。「長く、曲がりくねった道」という意味。

問一 ㍷ a e のカタカナを漢字に直しなさい (楷書で大きくていねいに書きなさい)。

問二 ㍷ A 「余すところなく」、B 「嘆息」の意味として適当なものを、それぞれ次から選び、記号で答えなさい。

A 「余すところなく」

ア すべて

イ 中途半端に

ウ 一部分

エ 最低限

問六

③『みんな何処へ行った?』という疑問は、このキース・リチャーズ的な意味で理解してほしい」とありますが、筆者は何を問題にしているのですか。適当なものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 滅んでいった者たちは土の中にいるのに、探そうともしていないという問題を問題にしている。
- イ 滅んでいった者たちがいる以上、残った者たちがどう行動するかということを問題にしている。
- ウ 滅んでいった者たちの所在がわからない上に、成功した者にも注目しないことを問題にしている。
- エ 滅んでいった者たちの所在ではなく、いてもよいはずの者がいないということを問題にしている。

問七

④「彼らはこんな風に語る」とありますが、「こんな風」の内容を、解答用紙の「この社会は進化論と同じように」につなげて、四十字以上六十字以内で答えなさい(句読点を含みます)。ただし、「進化」「競争」の二つの言葉を必ず用いなさい。

問八

⑤「勇ましい話である」とありますが、この表現に込められた筆者の意図として適当なものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 九九・九パーセントが滅びる世界であることを知らないで、サヴァイヴァルゲームで勝つと言っていることへの疑問。
- イ 九九・九パーセントが滅びる世界ということも考慮した上で、サヴァイヴァルゲームで勝つと言っていることへの同意。
- ウ 九九・九パーセントが滅びる世界であるにもかかわらず、サヴァイヴァルゲームで勝つと言っていることへの称賛。
- エ 九九・九パーセントが滅びる世界ということには目を向けず、サヴァイヴァルゲームで勝つと言っていることへの皮肉。

問九

⑥「滅んでいった生き物たちにたいしてずいぶんと失礼な話である」とありますが、筆者は生き物たちをどう扱うのがよいと述べていますか。本文中から三十字で抜き出し、はじめと終わりの五字をそれぞれ答えなさい(句読点を含みます)。

問十

⑦「大規模な絶滅こそが革新的進化に檜舞台を提供してきた」とありますが、この部分に疑問を持った生徒が先生に質問をしています。次の会話と【生徒がまとめたノートの一部】を読んで、あとの問いに答えなさい。

生徒 先生、「大規模な絶滅こそが革新的進化に檜舞台を提供してきた」とはどういうことですか。「大規模な絶滅」をすると、「進化」が止まってしまうのではないですか。

先生 確かにそう思いますよね。実は、この文章を読み進めると、「絶滅の道筋」として「三つのシナリオ」が述べられています。読んでみてください。

生徒 わかりました。読んでみます。

生徒 私がまとめたノートを見てください。

【生徒がまとめたノートの一部】

三つの絶滅のシナリオ

- (1) 弾幕の戦場 (field of battles) \parallel a
- 隕石いんせきの落下・火山の噴火などによる絶滅で、その生物がたまたまその場所にいた場合の絶滅。
- (2) 公正なゲーム (fair games) \parallel 能力 (遺伝子)
- 一定のルール (条件) のもとで生存競争を行った結果の絶滅で、選択的な絶滅。
- (3) 理不尽な絶滅 (wanton extinction) \parallel a \downarrow 能力 (遺伝子)
- (1) と (2) の組み合わせられた複合的な絶滅で、遺伝子を競うゲームの支配が a によってもたらされる絶滅。

生徒 私は、進化論といえば環境に適應するものが生き残る「(2) 公正なゲーム」だと思っていました。しかし、「絶滅」に注目すると、圧倒的に「(3) 理不尽な絶滅」が多いのですね。

先生 その通りです。「(3) 理不尽な絶滅」が具体的にどういふことか、わかりましたか。

生徒 はい、その文章の続きに**b**「(3) 理不尽な絶滅」の例として「恐竜」が載っていました。また、檜舞台とは「自分の腕前を見せる晴れの舞台」という意味だということも調べました。でも、結局、「大規模な絶滅」が「革新的進化」につながるのはどうしてなのかが、まだよくわかりません。

先生 なるほど。では、「革新的進化」を遂げたのは、どんな生物種だと書かれていましたか。

生徒 「革新的進化」を遂げたのは、恐竜とは逆に、それまで繁栄とは無縁だった小型の哺乳類である私たちの祖先でした……。あ、わかりました。隕石の衝突により、太陽光が遮断され、気温が低下したことによって、生存の条件が全く別のものになったということですね。そして、偶然、その条件に適應していた生物種である哺乳類が「革新的な進化」を遂げた。だから、進化とは一直線ではなく、暗闇の中の稲妻であり、ロング・アンド・ワインディング・ロードなんですね。

(1) **a** に入る語句として適当なものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 時 イ 運 ウ 場所 エ 法則

(2) **b** 『(3) 理不尽な絶滅』の例として『恐竜』が載っていましたとありますが、「恐竜」はどのようにして絶滅したと考えられますか。それを説明した次の文の空欄を、会話の語句を用いて、五十字以上七十字以内で答えなさい。

「恐竜」は隕石が直接当たって絶滅したわけではなく、

ために滅びた。

二 次の文章は三浦哲郎の小説「春は夜汽車の窓から」の全文です。これを読んで、あとの問いに答えなさい。

「特急の汽車って、どうして窓が開かないの？」

帰郷の旅が近づいてくると、きまって次女が訴えるようにさういう。初めのうちは、

「危険だからでしょう？ 特急はスピードを上げて走るから。うっかり窓を開けて首を出したり、手を出したりすれば、怪我をするかもしれないし、風でよその人に迷惑をかけるかもしれないし……。」

などと教えていた妻も、それが毎度のことだから、いまではもう、「また、はじまった。」と笑うだけだ。すると、
「笑い事じゃないわ。私の身にもなつてごらんよ、お母さん。」

次女は **A** さういう。

二、三日前の午後、いつになく早咲きした白木蓮の花を二階の窓から眺めていると、妻と次女とが庭で鳥籠の掃除をしながら、そんないつもの問答を繰り返すのがきこえた。

子供たちは、春休みで、そろそろ七カ月ぶりで岩手の祖母のところへ顔を見せにいく旅の **a** 仕度に取り掛かっている。宿題もなく、それに今年は、三人とも揃って卒業も入学もなくて、ただ四月の進級を待つだけの気軽な春休みだから、一週間ほどの岩手の旅も **X** 存分に手足を伸ばして楽しむことが出来る。勿論、次女もみんなと一緒に旅が出来るのは嬉しいのだが、ただ **Y** 悩みの種は、往復の特急の窓が開かないことだ。それを思うと、次女は憂鬱になつてしまう。

「あれ、本当に困っちゃうんだなあ。風がないと駄目なのよ、私。窓を長いこと閉め切っていると、酸素がだんだんすくなくなつてくるでしょう。そうすると、もう駄目なの。窒息するみたいに息苦しくなつてくる。軀がぐったりして、気分が悪くなつてくる。みんな窓が開かないせいなのよ。あれ、なんとかならないかしら。」

この子は、どういふものか乗物に弱くて、家では一番のはしやぎ屋なのに、なにか乗物に乗ると、**B** になつてしまう。それでも、近頃は電車やバスやタクシーには馴れてきたが、飛行機や特急列車は依然としていけない。上と下はすこぶる元気で、食欲も旺盛なのに、この子ひとりだけがぐったりとして、なにか食べるとすぐ吐いてしまう。とりわけ、特急でも半日がかりの帰郷の旅では、途中から、まるで病人をひと

り道連れにしているようなZあんはいになる。いちどなどは、汽車から降りても吐き気が止まらなくて、休み一杯を寝て過ごしたこともあった。医者に診て貰うと、脱水症状を起こしているといわれて、太いブドウ糖を注射された。

こんなことでは、せつかくの帰郷もお互いに気の重い旅になってしまう。なんとか次女を乗物酔いから救う道はないものかと、絶えず心掛けられているのだが、いまだに有効な方法が見つからない。酔い止めの薬も、次女にはいつこうに効き目がない。汽車に乗り込む時間や乗り込む前の食事も、いろいろな工夫してみたが、よい効果はあらわれなかった。どこかで、スルメをちいさく刻んだのをチューインガムのように絶えず噛んでいると酔わないと聞いたので、それを袋に入れて持たせてみたが、やはり効き目がなかった。

昔からあるおまじないのたぐい——たとえば梅干を臍に当てておく、などということも、暗示にかけるつもりで試してみたが、これも無駄に終ってしまった。座席を二人分占領してぐったり横たわっている次女が、服の下から手を入れて腹のあたりをもぞもぞさせていたかと思うと、「これ、返す。①でも、気にしないで。」

と、まだ絆創膏が十文字についている梅干を手のひらにのせて出したときは、②私はすっかりしよけてしまった。

こんなことを何度も繰り返しているうちに、次女自身も我ながら情けなくて、ひそかに原因を探っていたのだろう、遂に自分で、乗物に酔うのはその乗物の窓が密閉されているからだということを見つけた。次女の乗り物酔いの妙薬は、次女の言葉によれば〈酸素〉であり、〈風〉なのである。次女の旅には、〈酸素〉と〈風〉が必要なのだ。

実際、次女はそのことを発見してから、電車やバスやタクシーには酔わなくなった。どれも窓が開くからである。ところが、飛行機や特急列車は、そうはいかない。それで、次女はいまでも、帰郷の旅が近づくたびに、

「特急はどうして窓が開かないの？」

と恨めしそうに訴えたり、

「あああ、また盛岡まで六時間のb辛抱か。」

などと、うんざりしたりすることになる。

盛岡まで、というのは、私たちの町には特急は停車しないので、盛岡で普通列車に乗り換えなければならないからである。盛岡で普通列車に乗り換えると、次女はc早速窓際に陣取って窓を開け、存分に〈酸素〉と〈風〉を補給する。次女は、みるみる蘇る。頬には赤みが、目には

輝きが戻ってくる。

「ああ、おながが空いちやった。」

そういつて話す声にも、張りが出てくる。

次女は、ときどき窓から吹き込んでくる風に向つて鼻を突き出し、目を細くして、じつとしている。私は、そのときくらい次女が気持よさそうな顔をするのを見たことがない。まるで、好きな人の膝の上に背中をまるくして、ごろごろと喉のどを鳴らしている仔猫こねこのような顔をしている。

きのうの夕方、私は、無精むしょうしていた頭があまりにもひどくなったので、昔風に七三に分けた頭が好きなおふくろをびっくりさせないように、次女を連れていつものd理髪店へ出かけたが、そのとき、家の近くの川べりの道でチリ紙交換の車に出会った。

こんな商売にも縄張りというものがあるのかどうか、毎日この川べりの道を流していくのはおなじ車なのかどうか、私は家にも窓から覗のぞいて見たことがないからわからないが、チリ紙交換でございと触れてくる声やe節回しを聞いていると、同業入り混じって三人や四人ではないことがわかる。

ぼそぼそ声の囁ささやき型※ろくきよく。浪曲調。〈区役所からのお知らせ〉風——さまざまだが、私と次女が会った車は、声といい節回しといい、岩手の町の駅のアナウンスとそっくりであった。それで私は、その車とすれ違ってから次女にそういつてみた。

「……そういえば、似てるね。」

と、次女はちよつと耳を澄すましてからいつた。

それきり、③次女は黙もくつて歩いていたが、やがて、ねえ、お父さん、といつた。

「日本には、窓が開く汽車ってないの？」

「それはあるよ。」と私は答えた。「あるけど、そんな汽車は各駅停車ののろくさい汽車だよ。」

「のろくさくても、上野からその汽車に乗れば、お祖母おばあちゃんどこまでゆける？」

「ゆけないね、途中で何度か乗り継ぎをしないと。お父さんが学生のころは青森行きの普通列車が何本もあったんだけど、いまは一本もなくなつた。でもね、各駅停車を乗り継いでいくと、時間ばかりじゃなくお金もかかるよ。途中で一と晩か二晩、旅館に泊らないといけないから。そ

れに、食事だってそれだけ余計にしなくちゃならないし。」

次女はちよつと黙っていたが、

「私のお小遣い、来年の春までは貰わないってことにしても、足りないかなあ。」

と、独り言のようにそいつた。

そのとき、④私は正直いつて、ちよつと胸を突かれたような思いがした。次女の悩みがそれほど深刻なものになっているとは思ひもなかったからである。次女の小遣いは、月々わずか三百円だが、それをそっくり一年分諦めてしまおうというのは、子供にとっては容易ならぬことではないだろうか。

ゆうべ、私は、仕事を手につかぬままに、次女が憧れている〈窓の開く汽車の旅〉の思い出に耽った。私は、受験生時代から二度目の学生生活の前半ごろまで、窓の開く普通列車にしか乗ったことがなかった。妻を初めて郷里へ連れ帰ったときも、それから何年か後に都落ちをしたときも、夜行の普通列車であった。その翌年の春、再起を志して単身上京したときも、やはり夜行の普通列車であった。

真夜中に、どこかのちいさな駅で、ごとりと停まる。浅い眠りから醒めて窓を上げてみると、郷里ではまだ遠かった春が微風に乗って流れ込んでくることがあった。誰もいないホームの柵の外から枝をひろげている桜が満開で、夜明けにはまだ大分間があるというのに、勿体ないほど花を散らせているのを見たこともある。

また、いつかの春の夜、どこかの駅から乗り込んできて私の前の座席に着いた中年の女の人が、窓を上げると、外のホームには、下は五つぐらいの男の子から上は小学校六年生ぐらいの女の子まで、おなじ兄弟姉妹らしい五、六人の子供らがいて、「父ちゃんに、軀に気をつけてってな。」「母ちゃんも風邪ひかねよに。」などと口々にいい、母親も、「あいあい、盆には父ちゃんと帰ってくつから。みんな喧嘩しねよに留守をしてれや。」と答え、発車のベルが鳴ると、突然、茶目な男の子が指揮棒を振る真似をして、子供らは低い声で〈螢の光〉を合唱しはじめた。

母親はびっくりして笑い出し、つぎにはあわて気味に、「やめれ。やめれつたら。」と子供らを軽くぶつ真似をしているうちに汽車が走り出し、ホームの灯が流れ去って外が暗闇になると、母親はちいさく舌打ちして窓を閉めたが、不意に、その窓ガラスに額を強く押し当てて、⑤すすり泣きをはじめた。

あの夜の子供らの〈螢の光〉と、母親の額が窓ガラスに立てた、ごつ、ごつという鈍い音は、まだ私の耳のなかにある。

今年の春は、窓の開く夜行列車を乗り継いで帰ろうか？ 次女と一緒に、仔猫のような顔をして窓から春の匂においを嗅かぎながら……。

※浪曲…三味線しやみせんを用いて物語を語る伝統芸能。なにわぶし。

※都落ち…東京にいられなくなって地方に住まいを移すこと。

※茶目…子どもっぽく無邪気むじゃきにおどける様子。

問一 a s e の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

問二 A B に入る語句を、それぞれ次から選び、記号で答えなさい。

A ア 口をとがらして イ 鼻を高くして ウ まなじりを下げて エ 頬をゆるめて

B ア うどの大木 イ ぬかにくぎ ウ 鬼に金棒 エ 青菜に塩

問三 X「存分に」、Z「あんばい」の意味として適当なものを、それぞれ次から選び、記号で答えなさい。

X「存分に」

ア しばらくは イ ぜいたくに ウ 心ゆくまで エ 思い思いに

Z 「あんばい」

ア 姿勢

イ 具合

ウ 心持ち

エ 仕上がり

問四

~~~~~ Y 「悩みの種」とありますが、ここでの「種」の漢字の意味として適当なものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 類似

イ 複雑

ウ 原因

エ 消滅

問五

① 「でも、気にしないで」とありますが、この言葉を付け足した次女の気持ちとして適当なものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア おかげですっかり回復したから私の体調のことは気にせず、家族での旅行を楽しんでほしい。

イ おまじないなどただの気のせいなのだから効いたかどうか気にせず、私のことを心配してほしい。

ウ 私の乗物酔いは何をしても治らないのだから私の状態を気にせず、そっとしておいてほしい。

エ たとえ私が非科学的だとあきれていたとしても気にせず、父はおまじないを信じていてほしい。

問六

② 「私はすっかりしよげてしまった」とありますが、その理由として適当なものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 次女自身が〈酸素〉と〈風〉が乗物酔いに効くことを見つけ出し、父のおまじないは無用になったから。

イ 他の人には有効なおまじないが次女には効かないことが分かり、次女存在をわずらわしく感じたから。

ウ わらにもする思いでおまじないを試したがまるで効き目がなく、つらそうな次女が気の毒だったから。

エ 思春期を迎えた次女におまじないを素っ気なく突き放され、父としていらだちと寂しさを感じたから。

問七

③「次女は黙って歩いてた」とありますが、この時に次女が考えていたこととして**適当でないもの**を、次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア チリ紙交換の車の放送は多様なバリエーションがあるが、今日の車は駅のアナウンスによく似ている。

イ 春休みに入り、もうすぐ七カ月ぶりに家族全員で岩手の祖母を訪ねる旅に出られることが嬉しい。

ウ 窓のない特急列車による盛岡往復の間の乗物酔いを思うと、せっかくの旅も気がめいつてしまう。

エ 父が学生時代の思い出を話すのは珍しく、夜行列車に興味がわいたのでもう少し詳しく聞いてみたい。

問八

④「私は正直いって、ちよつと胸を突かれたような思いがした」とありますが、それはどういうことですか。適当なものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分の大切なものを差し出してでも解決したいと思うほど次女の乗物酔いへの悩みが大きかったことを知り、子供ながらに真剣に解決策を探っている姿に軽い衝撃を受けたということ。

イ 毎回帰郷のたびにさいなまれる乗物酔いを深く思い悩む次女の姿を目の当たりにして、家族旅行に小遣いを使うことを当然のように無理強いしていた自分を反省したということ。

ウ 乗物酔い対策に手を尽くすこともせず、各駅停車を乗り継いで旅をするという非現実的な提案をしてわがままを通そうとする次女の身勝手さに苦々しい気持ちになったということ。

エ 次女のことをいつまでも子供だと思っていたが、皆での旅行を楽しいものにするために、自分の小遣いを我慢しようとするくらいに成長していることに喜びを感じたということ。

問九

⑤「すすり泣きをはじめた」とありますが、次の文はこの場面を解説したものです。 a～dについて、「事実」を記したものはア、「意見」を記したものはイを選び、記号で答えなさい。

一九六〇年代、a全国各地の農村で経済的収入を得るために都市に出て働く「出稼ぎ」が見られた。野菜や果樹などが商品として売れた西日本などの農村に対し、東北はコメの単作地帯だったため、出稼ぎに出ることが現金収入の近道であった。bこの場面の母親も、おそらく出稼ぎに行くのであろう。子供たちが合唱したc〈蛍の光〉は別れの歌として古くから親しまれてきた。d子供たちだって心では泣きたいはずだが、自分たちの生活のために働きに出ることを重々理解して別れの寂しさを歌ってごまかす。やむなく旅立つ母親も同様で、子供たちの前では気丈にふるまうが、列車内でひとりになると、こらえていた思いがあふれたにちがいない。e言葉に出さず、互いを思いやる親子の姿が印象的な回想シーンである。

問十

本文の表現と内容に関する説明として適当でないものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 白木蓮、鳥籠、チリ紙交換など素朴な日常が具体的に描かれることによって、今の「私」の生活が穏やかなものだと分かる。
- イ 次女との会話や回想の中の家族の会話に、口語や方言がそのまま使われることで、人物を生き生きと描くことができている。
- ウ 「ことり」「こつこつ」という擬音や〈蛍の光〉の合唱など聴覚が効果的に使われ、リアルさを帯びた回想になっている。
- エ 夜行列車の幻想的な描写を通し、すべての美しい思い出は「私」の夢にすぎなかったという物語の結末につながっている。

☐ 次の古文を読んで、あとの問いに答えなさい。

小松内府こまつのないふ、賀茂祭かもまつり見むとて、車四五両ばかりにて、一条大路に出で **a** たまへり。物見車ものみぐるまはみな立てならべて、すきまもなし。「いかなる車か、

のけられむずらむ」と、人々①目をすましたるに、ある便宜べんぎの所なる車どもを、引き出しけるを見れば、みな、人も乗らぬ車なりけり。②かね

て見所けんじよを取りて、③人をわづらはさじのために、空車を五両立て置かれたりけるなり。

そのころの内府うちふの綺羅きらにては、いかなる車なりとも、あらしひがたくこそありけめども、④六条の御息所みよすせじろのふるき例もよしなくや⑤おぼえた

まひけむ。 **b** さやうの心ばせ、情深し。

『十訓抄』による

※小松内府：平重盛しげもりのこと。平清盛の子。

※賀茂祭：京都の上賀茂神社かみが もじんじや しもがもじんじや、下鴨神社の祭り。

※物見車：祭りや貴人の行列などを見物するときに乗る牛車ウシクルマ。

※ある便宜の所なる車：祭りの見物を都合よく見られそうな場所にあった車。

※見所：祭りの見物をするための場所。

※内府の綺羅：平重盛の威光の盛んなこと。

問一

a 「たまへり」、b 「さやう」の読みを現代仮名づかいに直し、すべてひらがなで答えなさい。

問二

② 「かねて」、⑤ 「おぼえたまひけむ」の現代語訳として適当なものを、次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

② 「かねて」

ア いつも

イ 前もって

ウ 何回も

エ いつまでも

⑤ 「おぼえたまひけむ」

ア 思いなさっていたのだろうか

イ 覚えなさっていたのだろうか

ウ 悩みなさっていたのだろうか

エ 喜びなさっていたのだろうか

問三

① 「目をすましたる」とは「じっと見つめる」という意味ですが、何をじっと見つめているのですか。適当なものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 見物するすきまもない大路上で小松内府の車がいつ引き返すのかということ。

イ 勢いが盛んな小松内府がどんな華やかな車に乗っているのかということ。

ウ 小松内府の車が祭りを見るためにどの車を移動させるのかということ。

エ たくさんの車がひしめきあっているのどの車が壊されるのかということ。

問四

③「人をわづらはさじのために、空車を五両立て置かれたりけるなり」、④「六条の御息所のふるき例もよしなく」とありますが、

次の文はその理由を説明したものです。  X  Z に入る語句として適当なものを、あとの選択肢からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

「六条の御息所」は平安時代に  X によって書かれた『源氏物語』に出てくる主人公、光源氏の愛人の一人です。六条の御息所は賀茂祭に先立つ儀式に光源氏が出るというので、車で見物に行っていました。後から来た光源氏の正妻・葵あおいの上たちの車に場所を横取りされ、辱はずかしめられました。その「ふるき例」のことを言っています。小松内府は  Y と思ってわざわざ誰も乗っていない車を置いていましたが、それは六条御息所の例から祭りを見るための場所争いを  Z からなのです。

X

ア 清少納言

イ 紀貫之

ウ 紫式部

エ 兼好

Y

ア 人を笑わせまい

イ 人を感激させまい

ウ 人を病気にさせまい

エ 人を困らせまい

Z

ア 恨んでいた

イ 感心しなかった

ウ 楽しんでいた

エ 笑っていた

問五

この古文の小見出しとして適当なものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 小松内府の無意味な心配

イ 小松内府の生意気な態度

ウ 小松内府の不安定な情緒

エ 小松内府の細やかな配慮